

ルモルとヒジョブの境界

社会主義的世俗主義を経たウズベキスタンのイスラーム・ヴェール問題

帯谷 知可

京都大学

私の話は、ウズベキスタンという旧ソ連中央アジア諸国の一つを舞台にしたものです。現在ウズベキスタンで起こっているさまざまなことは、ポスト社会主義の課題——具体的に言うと20世紀的なモダニティの見直しという問題につながるとは思います——そしてイスラーム復興、さらに政治体制としての権威主義という三つの問題が交錯するような磁場で問題化していると見ることはできるのではないかと考えています。

1. ウズベキスタン

まず、ご存じではない方もおられるかもしれないので、ウズベキスタンについての概略をお話します。2017年に人口はついに3,000万の大台にのり、3,200万人となりました。エスニックな意味でのウズベク人が人口の約8割を占めます。その他にも、カザフ人やクルグズ人、あるいはタタール人といったいわゆるムスリム諸民族が人口の中に含まれます。従って、人口の9割以上が「ムスリム」だと言える社会です。宗教的に次に多いのは、だいたい数は減りますが、ロシア正教徒になるとは思います。

なぜ「ムスリム」とカギカッコを付けたかと言えば、やはりソ連時代にかなり徹底した社会主義的な世俗主義、科学的な無神論教育と政教分離が浸透した経緯があるので、「仏教徒でもないしキリスト教徒でもなくムスリムだ」という意味でのムスリムとすれば9割以上ですが、どれぐらいの人が信仰実践をしているか、きちんと信仰告白をした上でのムスリムなのかと問われると、その数は明確には言えないところがあります。

ソ連時代末期、1980年代後半からペレストロイカという大改革が始まって以降、ウズベキスタンでも民主化・自由化が少しずつ進んで、イスラーム復興の諸現象が顕著に起こるようになりました。ですから改めてムスリムであることに目覚めて、より敬虔な

生活を送ろうという人も増えています。信仰実践については地域差もあると思いますし、都市と農村でも違うと思いますし、国民の間で幅が出てきているところがあるかと思っています。

政治体制としては、しばしば政治学の分野では「大統領制権威主義」と言われますが、イスラーム・カリモフという人物が独立の前から実権を握って、2016年9月に病気で亡くなるまでずっと政権の座にありました。非常に強い権限を大統領が持っている体制でした。その死後、ミルズィヨエフ新大統領の体制になって、様々な変化も出てきているというのが現状です。

イスラーム復興との関連で言うと、もちろん80年代後半から「草の根のイスラーム復興現象」がさまざまな形で見られましたが、1991年の独立直後の時期から、ウズベキスタンの内からイスラーム過激主義組織、つまり暴力に訴えるようなイスラーム主義のグループが出てきました。それがアフガニスタン内戦や1992年からのタジキスタン内戦などと連動して、ウズベキスタン由来のグループが国外に弾き出されて、アフガニスタンに逃げてそこでタリバンやアルカイダに保護されるような状況もありました。1990年代末からは何回か爆弾テロ事件などが起こるようになり、イスラーム過激主義に対する警戒心が非常に強くなったという背景があります。

表面的には民主主義国家であり、世俗主義と政教分離を強く主張していますが、基本的には権威主義の国なので、さまざまな統制がきつく、特にイスラームに対する強い統制が認められます。ですから、国民の間で、一方ではより敬虔であろうとする人々がいて、他方でソ連型の世俗主義を守ろうとする人々がいるわけで、かなりイスラーム感の違いが出てきています。そしてイスラーム主義に対する弾圧がきついがゆえに、それが暴力に訴えないとしても許されない側面があるがゆえに、イスラーム主義を深める人たちと世俗主義を徹底したい人たちとの間で、な

かなか建設的な会話が成り立たないという状況もあると思います。

独立後の「公のイスラーム」の体系

ウズベキスタンではどのように国家がイスラームを管理・監督しているかについても触れておきましょう。ソ連時代にはムスリム宗務局という機関があって、ソ連のイデオロギーに照らして好ましい形のイスラームを体现するという役割を担いました。厳密に言うと国家機関ではなくて、社会团体、社会組織という位置づけだったのですが、実際には共産党や国家の意向を強く受けてイスラームを管理・監督する役割を担った機関です。独立後も基本的にこれが再編されていて、ウズベキスタン単独のムスリム宗務局となっています。

ムスリム宗務局の宗務局長はムフティーと呼ばれ、国内でもっとも権威の高いウラマーです。ムスリム宗務局の中にはウラマー評議会という最高決定機関があって、公認のイスラームの体系の中で、もっとも権威のあるウラマーたちがそこに集結していることとなります。ムスリム宗務局に対しては、大統領府にある宗教問題担当大統領顧問と、内閣傘下の宗教問題委員会が指導・監視をしています。

イスラーム教育の点でも、国家の意向に沿った形のイスラーム教育機関としてソ連時代にも機能したイスラーム学院ミーリ・アラブ・マドラサがありました。これは歴史的にたいへん権威の高いマドラサで、ソ連全体ではほぼ唯一機能したマドラサでした。現在は高校ないし専門学校相当ぐらいの公認のイスラーム教育機関となっています。ミーリ・アラブ・マドラサを卒業すると今度はタシュケントにあるイマーム・アル・ブハーリー記念イスラーム大学に進学し、ここを卒業するとムスリム宗務局で働いたり、公認のイマームになったりすることができます。

独立後に新たに内閣の管轄下にタシュケント・イスラーム大学が設置されました。こちらは比較的世俗の立場からイスラームを研究するというコンセプトで、イスラームに関することを中心に教育・研究を行う組織です。この公のシステムの外で、イスラームの教えを広めることは、現在は法律で禁じられています。ですから、世俗主義と言ってもいろいろありますが、おそらくトルコなどと同様に、国家が明らかに宗教を管理・監督するという意味での世俗主義であり、ソ連的な世俗主義を強く継承している側面があ

ると言えます。

社会主義体制のもとでは、宗教は基本的に好ましくないものという前提がありました。独立後は「イスラームは民族の伝統の非常に重要な一部である」と積極的に言われるようになってはいますが、この意味するところは、イスラームはあくまでも伝統の重要な「一部」であって、それがナショナルな枠を越えることは決して許さないということであり、そこが非常に重要なポイントになっています。たとえば国境を越えてイスラームの運動が広がるといったことに対しては、非常にセンシティブに反応するので、従って、ナショナルな枠の中で、ウズベキスタンにとっての好ましいイスラームのあり方が、教育などさまざまな分野で模索されてきたというのが独立後の基本的な方向性でした。

2. 現代ウズベキスタンのヴェール問題

ペレストロイカから独立の時期にかけての頃から、イスラーム復興の流れの中で、必ずしもウズベキスタンにとって伝統的ではないような形のイスラーム・ヴェールが見られるようになりました。アメリカの研究者マリアン・カンブが1990年代前半にウズベキスタンにフィールド調査に入って観察したところによると、独立直後の時期から、「ヨピンチク(yopinchik)」と現地語で呼ばれるようなヴェールを着ける女性が出てきたといえます。

白や薄緑、水色などの地味な大判のスカーフを顔をくるむようにして着けて、緩やかな長い丈の衣服を着ている、そういうスタイルの女性たちが出現し始め、それはあご髭をたくわえた男性とともに、当時信仰深い人の象徴だと捉えられていたとカンブは書いています。

「ヨピンチク」という言葉は、ウズベク語の動詞「閉じる」の語幹 yop からできていますが、その他にも、トルコ風でしょうか、「ヤシュマク yashmak」という言葉が使われることもあったようです。私も1990年代初めからウズベキスタンに行き始めたのですが、「ヨピンチク」に該当するような白っぽいヴェールを付けた女性は、これはその当時私が特に意識していなかったこともあるかもしれませんが、以降20年ぐらいの間に2回か3回しか見たことがありません。しかもモスクのそばや旧市街で見かけたただけでした。

1990年代末から2000年代に入った頃から、今度は



資料2-2 ヒジヨブ

筆者撮影

「ヒジヨブ (hijob)」とウズベク語で呼ばれるヴェールが急増してきて、また少し別の段階になりました。これはスカーフを着け始めた女性たちがひとりひとり、個性的なトータルなイスラーム風のファッションとして身に着けたという側面があったかと思います。印象としては、若い既婚女性が多かったようです。目に見えて、必ずしもイスラーム関連施設ではない、たとえば首都の家族連れが出掛けるような場所で、かなり急激にこのヒジヨブと呼ばれるヴェールを着けた女性たちが増えるという現象が起こりました。

「ヒジヨブ」という言葉はもちろん「ヒジャーブ」というアラビア語から来ていて、それをウズベク語風にしたものですが、この「ヒジヨブ」は、ウズベキスタンにとって好ましくないイスラーム過激主義につながるかもしれないような「悪いヴェール」という意味合いで使われることになっていってしまうのです。

2.1 女性たちはなぜヒジヨブを着けるのか

女性たちがなぜヒジヨブを着けるようになったのかについては、着用自体が禁じられてしまったので、直接着用者にインタビューなどをするのはなかなか難しいのが現状です。従って間接的な情報ですが、「よりよいムスリム女性として生きること目覚めたという意思表示」であるとか、場合によっては「夫や父親など、家族がより信仰にそった生活をするようになったので、要請された」ということもあったようです。それからフェルガナ地方に長年フィールドに入っている菊田悠さんによれば、個人的に何か実現したい願いごとがあったりすると着けることもあるようです。私自身も、ある研究所で、それまでまったくヴェールを着けたことのなかった女性が、ある日突然ヴェールを着け始め、それはなぜかと尋ねたら「私、ちゃんと結婚したいから」という答えが返って

きたという話を聞きました。

それから、トータルなイスラーム・ファッションが、現地の人たちにとって新鮮な新しいおしゃれの方向性であり、なおかつ一定の規範に沿っているという側面もあるでしょう。

たとえば、2000年代にブラジルで製作・放映された連続テレビ・ドラマ O Clone はかなり広範囲に旧ソ連圏で放映されたということです。このドラマは、ブラジル人女性が波乱万丈の人生を送りながら、モロッコでムスリマになってヴェールを着け始めるという筋立ての壮大なメロドラマとのことですが、キルギスからの留学生から得た情報によれば、それが中央アジアの若い女性に大人気となり、その影響でヴェールを着けるようになった人が急増したそうです。

従って、おそらくヴェールを着けるようになった女性たちにとっては、先ほどの後藤さんのお話にもつながるかもしれませんが、一人の個として、女性として、人間として、自分らしい生き方を求めるにはどうすればいいのかという選択の結果だったのではないかと推測します。自分らしい生き方とか幸福をどのような形で求めていくかということを考えたときにヴェールを使い始めたのではないかと思います。いずれ直接インタビューなどで確認できるようになるといいのですが。

2.2 ヴェールに対する当局の統制

ところが、特に政治的な要求を掲げているとか、何か危険なことをしているわけではなく、ただヴェールを着けただけの女性たちに対して、当局の側がこれを非常に厳しく統制するんですね。その根拠になっているのは、1998年に制定された「信教の自由と宗教組織に関する法」という法律です。俗に宗教法と呼びますが、これは「信教の自由」と題していますが、

明らかに背景にはイスラーム過激主義組織への対処が狙いにある法律です。宗教を前面に掲げた組織が集会をしたり結社してはいけない、あるいはウズベキスタン公認のイスラーム組織で教育を受けた人以外は国内でイスラームを教授してはいけないといった項目が入っています。その中に「公共空間で宗教的儀式のための衣服を着てはいけない」という条項があって、この「宗教的儀式のための衣服」にヒジョブが該当するということが根拠になっているわけです。

2000年代を超えた頃から、ヒジョブ禁止の動きがだんだん加速していきました。2004年には小規模なテロ事件が起きたことを受けて、カルシという地方の町のあるマハツラ（地域共同体）長が「これからヒジョブを着けている女性は過激主義者とみなす。一人ひとりに問うことはせずに、ヒジョブを着けたら過激主義者として逮捕する」と言い始めて、それが連動する形で他の町にも広がったとインターネット・ニュースで伝えられました。その後、警察が乗り出すような形で、バザールで販売者や着用者を統制することになり、2015年にはかなり大規模に各地で摘発が行われています。

この時の摘発で拘束され尋問された女性は、「いますぐここでヒジョブを取るか、それとも対テロ部門で尋問を受けるか、どちらを選ぶか」と言われたということが伝えられています。当局者も「ヒジョブを着けるような服装は宗教的過激主義者の女性たちがしてきたもので、そういう女性たちはヴェールや長いドレスの下に銃を隠し持っているかもしれないではないか」という旨の発言をしています。

2.3 ムスリム宗務局もヒジョブ否定の立場

このヒジョブと呼ばれるスタイルについては、おそらく個々のウラマーたちを見ていくと、意見の相違はいろいろあるのだろうとは思いますが、基本的にはムスリム宗務局としてはヒジョブは容認しない立場をとっています。あるウラマーは、ウズベク人女性はスカーフを着ける必要はないと言った上で、「信仰篤くスカーフを着けることを望む女性は、伝統的なルモルと呼ばれるスタイルのスカーフを着ければいい。それがウズベク人女性にはふさわしく、またそれで十分だ」ということを言っています。

同様のことはソ連時代から独立後にかけても権威のあるウラマーたちが発言していたようです。ウズベキスタンの研究者バフティヤル・ババジャノフさ

んによると、イシャー・ババハノフというソ連時代の最初のムスリム宗務局長は1940年代に、「クルアーンはムスリム女性にヒジャーブ着用を要求していません。ルモルで十分である」と発言しています。

それから、すでに亡くなりましたが、現代ウズベキスタンのウラマーとしてもっとも権威のあったムハンマド＝サディク・ムハンマド＝ユスフは、あえてヒジャーブ問題に公に言及したり書いたりすることを控えていたふしがあると、ババジャノフさんは書いています。ただし、彼と対話したところによると、「女性が覆いを付けることは義務である」と彼は考えていて、ただし、全身をすっぽり覆うようなスタイルを無条件に受け入れていたわけではなくて、首のあたりまでを覆うスカーフが適切だと考えていたらしいとババジャノフさんは解釈しています。

従って、ウズベキスタンでは世俗主義や政権分離の原則をたてにして、個々の女性たちがなぜヴェールを着用するにいたったのかがほとんど問われず、またヴェール着用の問題が社会的に大きな議論になることもほとんどなく、上からの指令によって、ヒジョブが「悪しき者」や「他者」を示すマーカーになってしまっているという状況があったと思います。それに対して着用した女性たちが抗議行動を起こすということも観察されませんでした。

問題のありようとしては、トルコやフランスのイスラーム・ヴェール問題と、かなり相通じるころがあるでしょう。世俗主義と、信教の自由や服装の自由という二つの問題がぶつかっているということだと思います。フランスの場合には、ヴェールを着けた北アフリカ出身の移民たちが他者として排除されていくという議論ですが、こちらのケースでは同じウズベク人の中に他者を生み出して排除することにつながりかねない問題ではないかと思うわけです。

従って、このヴェール問題を、イスラーム・ジェンダー学やグローバルなヴェールをめぐる議論とつながら考察してみる試みの一環として、ウズベキスタンで「よいヴェール」として捉えられているルモルと、「悪いヴェール」として捉えられているヒジョブとの二分法をめぐって考えてみたいと思います。私は最近になってイスラーム・ジェンダー学を少し勉強し始めたところで、ライラ・アハメドや『ヴェールの政治学』を書いたジョーン・スコットの議論にかなり共感しているので、それらを参照しながら考えてみたいと思います。



資料2-3 パランジ
「リクベスヘ」(Photo by M. Penson)



資料2-4 ルモル
筆者撮影

3. 女性の装いと社会主義的近代化

20世紀中のソ連時代に、ヴェールを中心にウズベキスタンにおける女性の装いがどのような形で変わってきたのかを見てみましょう。

ウズベキスタンでいわゆる伝統的なイスラーム・ヴェールと考えられてきたものとは、顔の前に馬の毛で編んだネット状の黒い布を掛け、さらにその上から分厚いベルベットのような生地で作った、飾り袖の付いたコートのような長衣を着けるというものでした。長い袖は背中側で縫い留められていて、実際にはその袖に腕を通すことはできませんが、それを頭からすっぽりかぶって全身を隠したのです。黒いネットが膝下までくるようなスタイルのものもあります。これがソ連体制下で根絶運動が行われるまで、現在のウズベキスタンやタジキスタンの女性が外出のときに着用していたヴェールです。コート状の長衣をパランジと言い、顔を覆うネットのことをチムマトあるいはチャチヴォンと言います。

3.1 女性の日常の装い

ところが、ロシア帝政期の民族誌などを読んでみると、イスラーム・ヴェールと厳密に言えるかどうか分からないところもありますが、このパランジの下には、さらにもう二つ、スカーフ状のものを着けていたことがわかります。もっとも内側に着けているのが一般的に「ルモル」と呼ばれたスカーフでした。ルモルは、女性が朝目覚めたらすぐ髪の上に直接着けるものでした。室内でも着けていたのです。外出するときには、その上に「ドゥッラ」あるいは現在では「ペシャナボグ」と呼ぶらしいのですが、四角いスカーフを斜めに折って額の上にハチマキ状に結びます。ル

モルのほうはシンプルな、無地の綿かモスリンのスカーフですが、ドゥッラは色鮮やかな装飾的要素の高いもので、柄があったりして華やかで、場合によっては富裕層であればそこにさらに金属の頭飾りを着けていたそうです。さらにその上からチムマトとパランジを着けて、外出したわけで、ルモル、ドゥッラ、チムマトとパランジという3層構造になっていたのです。

ソ連時代には、もっとも外側に着けていた、見た目のインパクトの大きいパランジとチムマトのセット、この二つがセットで着用されている状態をしばしば「パランジを着けている」と表現しますが、これを根絶することが1920年代の女性解放の象徴となりました。1927年3月8日の国際婦人デーを皮切りにして、パランジ根絶キャンペーン、「フジウム」が始まります。フジウムというのは「攻撃」という意味で、「あらゆる悪しき習慣や伝統や封建制の遺物を攻撃して根絶するぞ」という非常に勇ましいスローガンなのですが、そのもとでパランジ根絶キャンペーンが展開されました。

しかし、これに対しては、現地の保守的な考えを持つ男性の側から猛反発が起こって、あえてパランジを脱いで外に出た女性たちに対するハラスメントや暴力がたいへんな勢いで生じ、名誉暴力・名誉殺人のようなことにまでいたったために、根絶は一筋縄ではいきませんでした。それがあまりにも社会問題になって、パランジ根絶キャンペーンは頓挫してしまいます。その後も何回か、このパランジ根絶キャンペーンは行われ、徐々にパランジを着けずに女性が外に出るようになり、特に男性が戦線に行って不在であった第二次世界大戦を契機にパランジが姿を消していくことになっていったという経緯がありました。

3.2 ソ連全体としての女性解放運動

女性解放運動は、ソ連全土で共産党の指導の下に行われています。①社会主義の下での男女平等を実現すること、②女性の社会進出を促して女性も労働者になること、また時代的にみればかなり画期的なことだと思いますが、③家事・育児の社会化を実現することの三つがソ連の女性解放運動の全体としての目標でした。これは当時のロシアにとっても画期的な、先行きがどうなるかわからないようなソヴィエト政権の試みでした。これが中央アジアでも、ほとんど同時進行で行われることになったのです。

ただし中央アジアでは、女性は外出時にパランジを着けねばならないとか、女性の隔離——家長の許しがないと自由に外に出られない——といった状況があったので、女性を家の外に引き出して労働者にすることがソヴィエト政権にとっては重要でした。同時に、そうするには女性をイスラームの影響から引き離さなければいけないということも強く意識されていたと言われています。従って、ウズベキスタンの女性解放運動の中では、特にパランジの根絶と女性の隔離の根絶が目標となりました。

3.3 ヴェールをめぐるソヴィエト的言説

このパランジ、すなわちヴェールを巡っては、ある意味で非常にわかりやすい言説が、さまざまなメディアで繰り返されてきました。「ヴェールは女性を世界から閉ざす」「ヴェールは呼吸を妨げるので女性が不健康になる」「日光に当たれないので健康を害する」「労働の邪魔になる」「封建制の遺物だ」といった言説です。さらには「ヴェールを着用した女性がいるような民族は進歩的な民族ではない。従ってそういう民族には社会主義建設は担えないし、そういう民族は社会主義的民族になれない」というロジックで、ある意味で女性の存在が民族全体を象徴することにもなっていました。

やや後には「規律正しい共産党員の身内には、ヴェールを付けた妻や娘がいてはならない」ということで、家庭生活や日常生活までもイデオロギーに沿うような管理がなされていくことにもなりました。そもそも公の言説においては、家父長制とイスラームは、中央アジアにおける悪しき伝統や悪しき因習の根源と言われていたんですね。

そうした言説の例として、1927年3月8日、パランジ根絶キャンペーンの始まった日の共産党系の新

聞『東方のコムソモール員』を見てみましょう。「東方の女子たちにもっと門戸を開こう」というタイトルの記事があります。ソ連の中に「西」と「東」があったというのはすでに周知の議論ですが、「進んでいる西」と「遅れている東」ということです。中央アジアはこの「東」の枠組みの中に入っているわけです。同じページに「ヴェールを捨てよ」というフレーズも見えます。また同じページのイラストには、女性が工場で労働し、本を読んで知識を蓄え、赤ちゃんを片手に抱いて家事をして、とソ連的なウズベク人女性に求められた姿が描かれています。たくさんのが同時に女性に求められたということだと思います。

1930年代、40年代になりますと、だんだんとパランジを着けなくなります。パランジは着けずに顔を露わにし、白い大判のスカーフを頭にふわりと載せるスタイルが日常の装いになりました。パランジを着用しなくなった後のこういう大判のスカーフのことをルモルと呼んでいます。

ソ連時代を通じて、女性の日常的な装いは変化していきました。一方で、もちろん都市部では洋装化が進んだということはありませんでしたが、ウズベク人女性にとって民族的・伝統的要素を残した日常服としては、緩やかなワンピースの下にズボンを履いて、頭にルモルを着けるというのが一般的でした。ふわっと載せただけのスカーフもルモルですし、うなじのところでは後ろに結び目を作るスカーフもルモルと呼ばれます。ロシア帝政期の民族誌によれば、クルアーンのある部屋では女性は必ずルモルを着けるべきとされていたのでおそらく着用している人にとってはルモルにはもともとイスラーム的な意味があったと思われるのですが、ソ連時代にだんだんそれが薄まっていった側面があったのではないのでしょうか。

やがて都市部の女性や若い年代の女性たちは、だんだんスカーフ自体を着けなくなっていきますし、夏になれば半袖にするし、ズボンも履かないという変化が起こってきます。

資料2-5の写真は1980年代頃の首都タシュケントの女性たちを写したものです。色鮮やかなイカット(緋)は、ウズベキスタンの特産品です。そして緩やかなスタイルだけれども比較的丈の短い、半袖のワンピースを着ています。これが独立後になると、グローバリゼーションのもとで外からさまざまなものが入ってくる状況になりますから、それぞれが自分のお財布の許す限りで好きな服装をすることになり、



資料2-5 1980年代のタシュケントの女性
Uzbekistan, Moskva: Izdatel'stvo Planeta, 1984.より

私たちと変わらないような服装になります。

こうした経緯があったあとに、イスラーム・ヴェールとしてのヒジョブを着ける女性たちがワッと目に見えて増えてくるような状況になりました。

4. 植民地主義的ダイコトミーの継承と 権威主義体制

ヒジョブを着けているということだけがマーカーになり、「悪しきもの」だとみなしてしまうような見方・考え方はどこから来るのだろうかと考えてみると、これはまさにアハメドなどが議論していることですが、やはり19世紀ヨーロッパの植民地主義的言説に行きつくように思われます。

4.1 19世紀ヨーロッパのヴェールをめぐる 植民地主義的言説

植民地主義言説とは、アハメドの言葉を借りると、19世紀ヨーロッパで勃興したフェミニズムの語りを非常に巧妙に取り込んで、ヨーロッパの植民地主義者たちがイスラーム中東世界を植民地化していくときに展開された、植民地支配を正当化させるために出てきた言説です。ここでは、アハメドが書いているように、「イスラームは本質的かつ不変的に女性に対して抑圧的であり、ヴェールや女性隔離がその抑圧の典型である。そしてこれらの慣行こそイスラーム社会が全般的、包括的に遅れていることの根本原因である」と決め付けるような言説のことを便宜的に植民地主義的言説と呼ぶことにしようと思います。

こうした植民地主義的言説は、19世紀から現代に至るまで、少しずつ姿を変えながらずっと生きていたのではないのでしょうか。その中には「進歩/後進」、「自由/抑圧」、「ヨーロッパ/非ヨーロッパ」、「ヨーロッパ/イスラーム世界」、「西/東」というようなダ

イコトミー（二分法）が埋め込まれています。こうした植民地主義者の側の二分法的な見方が、だんだん植民地側の現地のエリートのほうにも埋め込まれていって、一部の人は、「ヨーロッパ化してヴェールを捨て、自分たちも近代化しなければならない」と覚醒し、植民地発の女性解放論者が出てきたりします。あるいは植民地主義に反発してナショナリズムに目覚め、「ヴェール着用は私たちの重要な伝統文化の一部だから、守らねばならない」と逆の主張をする人たちも出てきます。しかしどちらもダイコトミーに囚われている点では共通しているというのがアハメドの見方だったのではないかと思います。

4.2 帝政ロシアが 中央アジア・ムスリム女性に向けた視線

このような見方をウズベキスタンにあてはめるとどうなるのかを見てみたいと思います。ソ連時代以前は帝政ロシアが中央アジアを支配していましたが、ロシア人たちが中央アジアのムスリム女性をどう描いていたかを見えます。

たとえばナリフキンNalivkin夫妻の書いた『フェルガナの定住民女性の日常生活概説』（カザン、1886年）という、有名な民族誌的著作を取り上げてみましょう。夫のヴラジーミル・ナリフキンは後に東洋学者・民族学者として知られることとなりますが、帝政ロシアの中央アジア征服に軍人として参加し、征服過程でのあまりにも残酷な軍事行動に嫌気がさして、軍を辞めて中央アジアでロシア語教師や学者として生きる道を選びました。帝政ロシア時代の研究者の中でも中央アジアの人々の中に暮らし、人々にある種のシンパシーを持った人物だったと言われています。

著作の最後の部分に売春宿について書いているくだりがあります。そこには現地の、現在で言えばウズベク人女性ということになるでしょうが、家庭から逃げ出した女性たちがに集まっているわけです。売春宿にいる女性たちは、やがてパランジを着けずに顔を露わにして外を歩くようになって、現地の人だけではなく、周囲のロシア人たちもみな驚いたと書かれています。

そして、女性がパランジを着けずに出歩くことの意味について、「昨日まで彼女を抑圧していた過去の社会に唾すること、つい最近まで石打ちにするぞと脅かしていた体制の廃墟の中で彼女の歌う独自のラ・マルセイエーズの中間にあたるようなことだ」

と、少しまわりくどい書き方ですが、むしろ売春宿に身を寄せている女性たちが自由な状況になった、その自由を称えることに力点を置いて評価しているんですね。ラ・マルセイエーズはフランスの国歌で、フランス革命の象徴、自由の象徴ですね。ここではナリフキンが現地の人々の家庭が女性の自由を抑圧する場所だと見ていたことが明らかです。

あるいは、20世紀に入ってから新聞『新時代』のある記事の中に、現在のウズベキスタンの首都のタシュケントの女性たちについての記述があります。タシュケントには帝政ロシアが建設した新市街と、もともとムスリム住民が住んでいた旧市街とがありますが、その新市街を歩くロシア人女性たちについて、「顔を露わにするだけでなく、夏の暑さのもとで広くデコルテを開けた服を着て、この上なく解放されたロシア人女性たちが通りを闊歩するヨーロッパ・タシュケントで、ロシア人女性たちは、気の毒なサルト人女性たちに、どんな思想や感情を呼び起こすだろうか」と、ロシア人女性たちの進歩の度合いが、解放的な衣装や男性との自由な交流を象徴として語られているのが見て取れます。

これがソ連時代になると、ソ連という国は植民地主義を打倒してできたわけですが、今度はソ連的な科学的無神論によって、宗教は好ましくないものになり、世俗主義と政教分離を徹底することになりますし、あるいはマルクス・レーニン主義的な歴史の発展段階論、それからソ連の中に埋め込まれていた「西」と「東」の認識によって、やはり植民地主義的言説を支える二分法が変形・強化されていったと考えられるのではないのでしょうか。

「進歩／後進」は「革命後／革命前」ということとパラレルになります。ヴェールについて言えば、「ヴェールなし／ヴェールあり」というのは、実際に言葉としては「開かれている／閉じられている」という表現をしますが、それは「顔が見える／顔が見えない」を意味し、それが「明るい／暗い」「開放的／閉鎖的」あるいは「知識がある／知識がない」ということと限りなく重なっていくのです。

わかりやすい例をあげると、先ほど言及したババジャノフさんが提供してくださった1920年代の雑誌のイラストがあります。1枚のイラストでは中央に太陽、向かって左側が明るい世界、右側が暗い世界になっています。左側には知識の神殿にレーニンの写真が掲げてあって、パランジを取り顔を露わにした

女性がそこに向かって手を差し伸べている。一方、右側の奥には雲がかかっている、モスクやマドラサのような建造物が真っ黒に描かれ、その前にはパランジを付けた女性たちがいるのです。

同じく『マシュラブ』のイラストには、3月8日の国際婦人デーをモチーフにしたものも見られます。3月8日はヴェールを捨てる一つの契機になる日に設定されていましたが、3月8日のカレンダーに向かってヴェールを取って赤旗を掲げた女性たちが歩いてきているイラストがあります。そこに向かってターバンを着けた犬が吠え立っています。この犬は保守的なウラマーたちを揶揄しており、白いターバンは封建的で狂信的な、女性解放を認めないようなウラマーたちの象徴でした。

同じく3月8日をモチーフにしたイラストとして、数字の8の字の上下の丸でビフォー・アフターを描いたものもあります。上の丸の中のパランジを着けた女性たちにはターバンを巻いた男性たちがやいのやいのうるさく命令しているような様子が見えます。一方、下の丸の中のパランジを取った女性たちに対しては白いターバンの男性たちが唾を吐きかけて、顔に着けるチンマトをグシャッと手で握りつぶして悔しそうにしている。これらに見るように、とても明快な二分法が存在していました。

ウズベキスタンの独立後も、やはりこうしたものの見方が残っていて、基本的に独立後の時期に権力を握っていた人たちはソ連の科学的無神論の下で育ってきた人たちですから、メンタリティとしてある種の宗教アレルギーのようなものがあるということも指摘できるでしょう。そのもとで、先ほど述べましたように、ソ連的な世俗主義、国家によってイスラームを管理・監督するという意味での世俗主義が基本的に継承されていました。さらにイスラーム過激主義への懸念と、9.11以降の文明の衝突論のようなイスラーム世界に対する言説の影響が加わります。このときウズベキスタンはアメリカ側に付いて、アフガニスタン空爆を支援しましたが、その中でウズベキスタン由来のイスラーム過激主義組織ウズベキスタン・イスラーム運動のリーダーが、実際にアフガニスタン空爆のさ中に戦死するということが起こっています。こうした状況を巧みに利用し、「グローバル」になったイスラーム世界に対する言説をうまく取り込んで、国内のイスラームを統制しようとしていた側面があるのです。世俗主義は近代的であると

か、政教分離が世界的に見て正しいというような、ある意味でグローバル・スタンダードとみなしうるような価値観も巧みに編集して取り込んでいったと考えられるでしょう。

5. ルモルとヒジョブの境界とは？

ウズベキスタンのイスラームが「よいイスラーム」と「悪いイスラーム」に区分されて為政者たちによって語られることは、多くの研究者が指摘しています。「よいイスラーム」とは何かと言うと、ウズベキスタンにもともとあった伝統的な信仰のことです。それに対して「悪いイスラーム」とは、外来の過激主義を指します。

ヴェールについてもこうした見方が適用されていて、ルモルはウズベキスタンに伝統的な控えめな「よいヴェール」、ヒジョブは過激主義につながるかもしれない「悪いヴェール」という二分法が明らかに潜んでいます。この「よい」ほうに分類される諸々が、上からのナショナルな規範になっているのが今日の状況ではないかと思うわけです。

「よいヴェール」を指すルモルという言葉は、現在はヘッドスカーフやショールの類の総称として使われます。服飾史や民族学的な文献によれば、もともとウズベク人女性の伝統的な被り物とは、一番下にスカルクアップの類の帽子(ドツピ)を着けて、頭の周りをスカーフまたはターバンのような布で巻いて、さらに上からショールを着けるというように、3段階になっていたようです。ルモルとは、そもそもあまり長くない、大判の布でないターバンだったということですが、現在では、ターバン状のものもショール状のものもみんなまとめてルモルと呼ぶようになっているようです。

2015年にタシュケントで刊行された『ウズベキスタンのヘッドドレス』というタイトルの本がありますが、その中では被り物に関してイスラーム的な文脈での説明はまったくされていません。このような伝統的な被り物は、かつては家庭や社会の状況、貧富の度合いなどを反映させたものだったけれども、20世紀以降は、便利さと美しさという観点から、着用の選択や、どのように結ぶかの選択がなされていると書かれています。

一方、すでに触れたように、ルモルは、中央アジアの定住民女性が、朝起きて髪をなでつけたらすぐ頭

にかぶり、室内で常に着けているもので、特にクラーンの置いてある部屋では必ず着けなければいけないものだったとナリフキンは書いています。

ソ連時代になると、パランジを根絶したら、女性は何を着て外に出たらいいかというのが大きな問題になりました。共産党は洋装を奨励することも検討したのですが、それはやはりすぐに定着するわけもなく、そのための資金もなく、結局頭を緩やかに覆う、頭にスカーフを載せるのを容認することが、ある種の妥協点だったと思います。イスラーム・ヴェールを根絶するという意味では、最も目に付くヴェールとしてのパランジを捨てたことで根絶は主張できる。一方で、何か頭に着けていないといけないという規範を守るという意味ではルモルが残ったわけです。ある意味で、ルモルは緩衝だったところがあったのかと思います。ヒジョブが登場して以降は、「悪いヴェール」としてのヒジョブに対置されるものとしての役割をルモルは担うようになっています。

しかし、ヒジョブとルモルは何が違うのか見てみると、そこに大きな違いはあるのでしょうか。ルモルは、結び目を作らずにスカーフの両端を胸の上に垂らすか、うなじのところで結びます。ヒジョブはスカーフをあごの下にまで回して顔をきっちりくるむようにするというところが、あえて言えば決定的に違う点だと思います。それからヒジョブは少し目深にかぶる点も違うかもしれません。

ルモルのほうは、ソ連時代を通じてずっとあったものなので、とてもおしゃれとか素敵という感じではおそろくないのですね。一方、ヒジョブのほうは一つひとつが個性的で、全身をトータル・コーディネートしたり、装飾が付いていたりして、かなり華美な外出着と言えるでしょう。

どこが境界なのか、違うのかと言えば、スカーフがあごの下までをくるんでいるかどうかということと、さらには肌の露出の少ない緩やかな長い丈の服とセットになっているということも含まれるかもしれません。境界をあえて探すとすると、そういうところになるのかと思います。そしてこの境界を境界として設定するか、しないかが大きな意味を持つと思います。

資料2-6の写真で言うと、中央の女性のスタイルはヒジョブではありません。両脇の女性のスタイルはヒジョブということになります。ウズベキスタンでは、パッと見て、こちらがヒジョブでこちらはルモ

ル、と区別がついてしまうのが現状だとは思いますが。

6. まとめ——女性の装いと ナショナルな規範をめぐる

ルモルとヒジョブの違いというのは、もしかしたら見る人によっては、わずかな違いであるのかもしれませんが、特にウズベキスタンの為政者たちにとっては、ヒジョブは「イスラーム的過ぎる」、従ってナショナルな規範に合致しないと映ってしまっているのだと思います。

20世紀に経験してきた社会主義的・ソ連的な世俗主義と独立後の権威主義というものがあいまって、社会の中にイスラーム的なものが見える、見え過ぎることが過度に懸念される状況が、少なくともカリモフ政権時代は明確にあったのではないかと思います。

先ほども示しましたように、イスラーム・ヴェールが、好ましくないもののマーカーになってしまうことは、体制が変わっても継続していると言えます。一方で、女性の装いをめぐるナショナルな規範というのは、必ずしも上から押し付けられるだけではなく、揺れている側面もあります。そうした揺れる議論の一つとして、ヒジョブは好ましくないけれども、洋装——これはおそらくピタッとした服装やミニスカート、タンクトップなどがイメージされていますが——も好ましくないということをムスリム宗務局の関係者が発言しています。それではウズベク人女性は何を着るべきなのか、これがやはり現在も問われているのだということになるでしょう。

1930年代のあるプロパガンダ雑誌では、パランジを捨てたらウズベク人女性は何を着るべきかということで、ウズベク人女性のための洋装として、胸にフリルのついたブラウス、膝下丈のフレアスカート、洋風の靴、そして髪型はショートヘアというようなスタイルが提案されました。このようなことが今再び問われているのです。

また、まったく次元の違う問題ですが、現在ウズベキスタンではファッション産業がたいへんな勢いで起こってきています。デザイナーが何十人も生まれ、ファッション・ショーが頻繁に開催されるということが起こってきています。その中で、モードの世界で果たしてイスラーム・ファッションが出てくるのかどうか、それが市民権を得るのかどうか、おおいに気になると思います。ちなみに、2017年ウズベキスタンのあるデザイナーが初めてドバイで開催されたイスラ



資料2-6 ヒジョブ(左右)とルモル(中央)
筆者撮影

ム・ファッションショーに参加したことが伝えられています。

さらに、カリモフ時代が終わり新体制の下で——それでも権威主義であることには変わりはないと個人的には思っていますが——各方面で自由化が進展している例はいくつも観察できます。そうした中であるいは「よいイスラーム」の範囲が拡大したり、「よい／悪い」の境界が少しぼやけたりしてくるのかなという予感も少ししています。巨大な白亜の公認モスクが新市街に新設されたり、最近ではイスラーム文化センターやイスラーム・アカデミーの設立が計画されています。

さらにヒジョブが容認されるのではないかとという話も、今日ご参加の和崎聖日さんからうかがいました。ウズベキスタンでは大きな転換が起こりつつあり、その中で装いと規範をめぐる変化に今後も着目していきたいと考えています。

■参考文献

- アハメド、ライラ(林雅夫他訳)『イスラームにおける女性とジェンダー』法政大学出版局、2000年。
- 帯谷知可「『フジュム』への視線」小長谷有紀・後藤正憲編『社会主義的近代化の経験』明石書店、2011年、98-122頁。
- 帯谷知可「社会主義的近代とイスラームが交わる場所——ウズベキスタンのイスラーム・ヴェール問題からの眺め」村上勇介・帯谷知可編『融解と再創造の世界秩序』青弓社、2016年、161-183頁。

帯谷知可「中央アジアのムスリム定住民女性とイスラーム・ヴェールに関する帝政ロシアの植民地主義的言説」『西南アジア研究』84、40-54頁。

スコット、ジョーン W.(李孝徳訳)『ヴェールの政治学』みすず書房、2012年。

Babadjanov, B., “Paradise at the Feet of Mothers and Women: Soviet and Post-Soviet Discourses of Muslim Women’s Emancipation,” in Obiya C. ed. *Islam and Gender in Central Asia: Soviet Modernization and Today’s Society* (CIAS Discussion Paper No. 63), Kyoto: CIAS, 2016, pp. 19-39.

Kamp, M., *The New Woman in Uzbekistan: Islam, Modernity, and Unveiling under Communism*, Seattle & London: Univ. of Washington Press, 2006.

Khoroshkhin, A. P., “Sarty, ikh khoziaistvo, zhenshchiny i proch,” *Sbornik statei kasaiushchikhsia do Turkestanskogo Kraia A. P. Khoroshhina*, Sankt-Peterburg, 1876.

Massel, G., *The Surrogate Proletariat: Moslem Women and Revolutionary Strategies in Soviet Central Asia, 1919-1929*, Princeton, NJ: Princeton Univ. Press, 1974.

Nalivkin, V. P. and M. Nalivkina, *Ocheki byta zhenshchiny osedlogo tuzemnogo naseleniia Fergany*, Kazan’: Tipografiia Imperatorskogo Universiteta, 1886.

Northrop, D., *Veiled Empire: Gender and Power in Stalinist Central Asia*, Ithaca, NY: Cornell Univ. Press, 2004.

Obiya, C., “The Politics of the Veil in the Context of Uzbekistan,” in Obiya C. ed. *Islam and Gender in Central Asia: Soviet Modernization and Today’s Society* (CIAS Discussion Paper No. 63), Kyoto: CIAS, 2016, pp. 7-18.

Sodiqova, N. and Yu. Gaybullayeva, *O‘zbek milliy bosh kiyimlari XIX-XX asrlar*, Toshkent: Sharq, 2014.

V., L., “O sartiankakh,” *Novoe vremia*, No. 11339, 1907.